

「海外協働学習体験－韓国」における学び

— 国際理解教育の実践と意義 —

家田 章子

キーワード：協働学習、異文化理解、日本語・日本文化、韓国

概要

桜美林大学基盤教育院、フィールドスタディーズ授業科目の一つである「海外協働学習体験－韓国／フィールドワークE」について、事前研修、本研修、帰国後の振り返りでどのような取り組みを行っているか実践報告を行う。また、研修を通して学生がどのようなことを体得したのか、その経験をどのように生かそうとしているのかについても報告し、この科目の持つ意義について考察する。

この科目の特徴は、「協働学習」にあると言える。観光客として海外を訪れる場合や純粋な語学研修に参加する場合とも異なり、同じ年代の大学生と1週間行動を共にし、見学先における意見交換だけでなく、移動中や夕方以降の自由時間にも多くのことを語り合う時間を持つ。また、研修中は日韓の学生がグループを作り、合同で一つのテーマについて調べる活動がほぼ毎日行われる。この活動では様々な視点を取り入れ、多くの発見をしながら話し合いが進められており、最終日には発表も行うことになっている。

研修に参加する学生にとっては、この研修に参加する韓国学生が全員日本学科の学生であることも大きな意味をもつ。日本語や日本文化に関心を持っている学生と直接接することで、日本の文化や言語について見つめなおす機会が得られ、国内外の多くの人が日本について知ろうとしていることを実感できる。近年、多文化共生社会の実現を目指そうという動きが盛んであるが、この研修は具体的で身近な「顔」が見える形で異文化理解をする機会となるものであり、このような一人一人の小さな体験が多文化共生社会の実現を推進する力になるのではないかと考える。

1. はじめに

「海外協働学習体験－韓国」は2006年度に本学国際教育センター（当時）が提供する国際理解教育科目「フィールドワーク」の一つとして言語コミュニケーション学科（現在はリベラルアーツ学群）より申請され、2007年度に設置された科目である。¹⁾ 桜美林大学の学部生が海外提携校の学部生と、共同でプロジェクトワークなどを実施するこの科目の目的は、「基本的には日本語による活動を行い、異文化理解を促進すると同時に、文化を越えて共有するものを識り、それらを通して言語とその教育や学習に対する気づきを得、自国の言語・文化の意識化を図る。将来的に広く社会に貢献する人材を育成すること」（安藤 2007, p. 109）である。

2007年度にリベラルアーツ学群がスタートし、フィールドワークの科目は基盤教育院科目として設置された。基盤教育院は大学での学びの基礎となるような教育を行う組織であり、学群の枠を越えた科目が設置されている。基盤教育院には4つのデパートメントがあり、²⁾ フィールドワークの科目は、フィールド教育デパートメントの「フィールドスタディーズ」として「語学研修」「国際協力研修」「海外企業研修」「国際理解教育」「地域社会参加」等の科目に整理された。「海外協働学習体験－韓国」はこの中の「国際理解教育」の科目として設定され、1年生から4年生まで全学の学生が参加できる夏期の集中研修として運用されることになった。³⁾

この科目が設置されてから今年で3年目となり、初年度には多くの調整が必要だった科目の運営も安定してきたと思われる。2007年から2009年まで「海外協働学習体験 全過程アンケート」として帰国後に毎年同じ参加者アンケートを行っているが（章末＜資料1＞参照）、筆者が引率を担当した2008年度と2009年度の研修を中心に実践報告を行うとともに、この科目の持つ意義について考察したい。

2. 研修の概要

2.1 派遣先とプログラム参加大学

「海外協働学習体験－韓国」プログラムの派遣先は桜美林大学の提携大学の一つであり、本学の短期留学プログラム（RJ／考察日本プログラム）に複数の学生が参加している韓瑞大学校（以下、韓瑞大学）となった。韓瑞大学は1992年に開校した大学で、韓半島の中西部、忠清南道瑞山市に位置する6学部、52学科で構成された総合大学であり、山に囲まれた自然豊かなキャンパスで8500人の学生が学んでいる。

韓瑞大学は国際交流にも力を入れている大学で、2004年度から愛媛大学の学生を対象

とした「異文化体験研修」を行っており、桜美林大学はそのプログラムに2007年度から参加することとなった。当時は単位認定科目ではなかった愛媛大学とのプログラム⁴⁾に桜美林大学が参加するに当たり、プロジェクトワークを行う「協働学習」という時間を設定するなどの調整が行われた。

愛媛大学の参加者も桜美林大学と同様に全学から希望者を募り、様々なバックグラウンドを持つ学生が参加している。2008年度からは目白大学の外国語学部韓国語学科の1年生が短期語学研修の一部として「異文化体験研修」に参加することになり、2009年度には3大学から6名ずつ学生が参加する計画で準備が進められた。

2.2 研修期間および実施時期

韓瑞大学での研修期間は約1週間（2007年度は6泊7日、2008、2009年度は7泊8日）である。日本からの参加大学のうち愛媛は国立大学、桜美林と目白は私立大学ということもあり、夏休みの時期がそれぞれ異なるため実施時期についての調整は困難であった。また韓瑞大学は8月末から新学期が始まるので、学生がキャンパスに戻ってきて研修への参加を促しやすくなるものの、新学期の慌しさを避けて受け入れたいという意向もあった。結局、この3年間は9月の第1週あたりに実施しており、各回の開始日は2007、2008年度が9月2日、2009年度は8月30日であった。また、愛媛大学と桜美林大学は仁川空港で合流するため、松山－仁川間の週3便のフライトに合わせて日程を調整する必要も出てくる。研修には日程の最後に1泊のホームステイが含まれているため、週末にホームステイを体験して日曜日に帰国するパターンが理想的であろうという話し合いもなされ、2009年度は日曜日に入国し、次の日曜日に出国するようなスケジュールが組まれることになった。

前節で述べたように、桜美林大学の学生はこの研修で2単位を取得することができる。単位取得のためには、現地の研修に加え、事前研修3コマ（1コマ90分）および事後研修2コマに参加しなければならない。また、帰国後レポートを提出し、それを基に帰国報告会で発表をすることが必須である。次節では、2009年度の実践を中心に研修全体の流れについて報告する。

3. 研修の流れ

3.1 参加者募集および抽選

2009年度の「海外協働学習体験－韓国」の募集は4月に春学期が始まってすぐに開始した。本学のネットワークシステム（OBIRIN e-Campus）でのお知らせ、学内の電子掲示、

ポスターの掲示、日本語教育関連授業でのチラシの配布、学内関係部署へのチラシの設置など複数の手段で宣伝を行い、5月末には募集を締め切った。募集の際には、申し込み前にできるだけ希望者と個別に話してプログラムの特徴を伝えるようにした。これは、研修に「協働学習」という日韓の学生が合同でプロジェクトワークを行うことが含まれていることを認識してもらい、見学して楽しく過ごすだけではないことを知った上で申し込むかどうかを決めて欲しいと考えたからである。

2008年度は参加を希望した7名全員が研修に参加することができたが、2009年度は宿舍の収容人数の関係で参加者を6名以下にするよう韓瑞大学から要請があったため、抽選を行って6名の参加を決定した。⁵⁾ 抽選の際には、参加者が特定の専攻や学年に偏らないように配慮した。⁶⁾

3.2 事前研修

参加者の顔合わせ、パスポートや保険加入などの事務的な手続きの説明については6月中に昼休みを利用して行った。3コマの事前研修のうち、2コマは授業期間終了直後（補講期間中）の午後に授業2コマ分を使って対面で行った。「海外協働学習体験－韓国」は韓国の学生との交流だけでなく、日本人学生同士も話し合いや意見交換をしていろいろな視点を得ることが大切だと考えているため、まず参加者同士の関係作りを心がけた。

自己紹介を行う前にアンケートを配布し、自分がなぜ参加しようと思ったのかなどについて整理する時間を作った。アンケートの質問項目は以下の通りである（実物はA4サイズ）。

海外協働学習体験－韓国 事前研修 アンケート		
学部・学群	学年	名前
2009.07.31		
◆なぜこのプログラムに参加しようと思いましたか。		
◆「韓国」と聞くと、どんなイメージが浮かびますか。		
◆韓国のことで、関心を持っていること、知りたいことは何ですか。		
◆このプログラムにどんなことを期待していますか。		
◆これまで韓国とどんなふうに関わったことがありますか。		

図1 事前研修 アンケート

参加者の自己紹介では、このアンケートの内容に関連付けて、なぜこの研修に参加しようと思ったのか、韓国のどんなことに関心があるかを中心に行い、そこで出た内容をきっかけにしてお互いに理解を深めた。

参加した学生の多くは、これまで桜美林大学でコリア語を学んだり、韓国に旅行をしたり、ドラマや音楽などを楽しんだりすることで韓国と関わってきている。中には、アルバ

イト先や大学の授業で韓国人の知り合いがいる学生もいた。その学生たちが「海外協働学習体験－韓国」に参加したいと思った理由の多くは「韓国の友人を作りたい」「より韓国のことを知りたい」という気持ちである。学生たちの関心は、韓国の歴史や日韓の関係、若者文化、ファッションや恋愛事情に至るまで多岐に渡っており、韓国の同世代の学生と話してみたい、もっと聞いてみたいという気持ちで多くのことを期待して本研修に参加したようである。

韓瑞大学から桜美林大学に短期留学している3名の学生にも事前研修への参加を打診したところ、3名とも参加を快諾してくれた。留学生にもそれぞれ自己紹介をしてもらった後で、母校である韓瑞大学についての紹介や、韓国の大学生事情、興味のあることについて自由に話す時間を設定した。これは、韓国のことを少しでも知ってもらうためだけでなく、現地研修の模擬体験をして欲しいという意図もある。何となくおしゃべりをするのではなく、何気ないことをきっかけに話を広げ、意見を交換して欲しいと思っていたので、メモを取りながら話してもらうようにした。韓瑞大学の学生と話しているうちに、学生個人についての関心も高まり、なぜ日本語を勉強しているのか、日本に来るのは何回目かなどという質問も飛び交っていた。自分たちが韓国に興味を持っているのと同様に、日本や日本語に関心を持ち留学している学生と交流できたことは参加者にとって有意義な事前準備となった。現地研修で会う学生たちは桜美林大学にいる留学生の後輩たちでもあり、留学生のうちの一人は韓瑞大学における昨年度の「異文化体験研修」の参加者であったので、現地研修を具体的にイメージしやすかったようである。韓瑞大学の学生との交流の後、アンケートという形で振り返る時間を持った（実物はA4サイズ）。

海外協働学習体験－韓国 事前研修 アンケート（2）			
			2009.07.31
学部・学群	学年	名前	
<p>韓瑞大学の学生の話聞いて…</p> <p>◆何か新たに知ったこと、意外だったこと、面白いと思ったことは何ですか。</p> <p>◆新たに関心を持ったことはありますか。あれば、書いてください。</p> <p>◆その他感想</p> <p style="margin-top: 20px;">＊メモ欄＊</p>			

図2 事前研修 アンケート（2）

事前研修では現地研修の中核の一つとなる「協働学習」の準備として、日本語教員養成科目の担当教員である安藤節子氏によるリサーチの目的や方法についての研修を行った。参加者はアンケートによる意識調査や観察による実態調査、文献調査、資料調査、インタビュー調査などについて具体的な例を聞きながら学んだ。

2008 年度、2009 年度に導入したものに moodle によるオンラインの事前研修がある。これは、研修への出発が 8 月末ごろということもあり、事前研修から出発まで何もしないで過ごすのではなく、韓国へ行く準備を心や頭で進めておいてほしいという意図と、自分が知っていることや調べたことを一緒に研修に参加する学生同士で共有して欲しいという意図があり、行ったものである。2008 年度は事前研修の必須項目ではなかったが、2009 年度は事前研修の 3 コマのうち 1 コマ分をオンラインで行うことを明言し、積極的に取り組むように働きかけた。具体的には、関心のあるテーマごとに moodle のコース内に「フォーラム」を作成し、学生が自由に書き込めるようにした。テーマはその年の参加者が話し合って自由に設定するようにしたところ、以下のようなフォーラムを立ち上げるようになった。













【2008 年度のフォーラム】	【2009 年度のフォーラム】
 韓瑞大学・忠清南道の情報	 大学・周辺情報・行ってみたいところ
 韓国の文化（食文化、芸能など）	 食べ物
 韓国の最近の情報（ニュースなど）	 美容・ファッション
 知っておくと便利な情報	 音楽・テレビ（アーティスト、芸能情報）
 日韓関係、朝鮮半島の歴史	 準備について
 おすすめスポット	
 その他いろいろ	

図 3 Moodle のフォーラム名（2008 年度および 2009 年度）

夏休み中は帰省や部活の合宿などで忙しい学生も多く、各テーマにおけるディスカッショントピックの数は 2～5 程度と少なかったが、本人以外の参加者が書き込んだトピックについて必ず複数の学生がコメントを返信しており、知識を増やすという目的だけでなく、参加学生間の距離感を縮めるためにも、事前研修から出発までの 1 ヶ月のブランクを感じさせないためのツールとしても役立ったのではないと思う。研修終了後の参加者アンケートによると、事前研修の内容や時間数に関しては参加者全員が適切であるというプラスの評価をしており、特に韓瑞大学からの留学生の話が聞けたことが高く評価されていた。

3.3 現地研修

研修の内容は毎年、韓瑞大学の「交流協力処」という部署内の国際交流支援課の業務に携わる教職員によって案が作成される。この案は、前年の実施時に行ったアンケート、帰国後に参加大学で行うアンケートのフィードバック、滞在中の引率教員の意見交換などを参考に毎年少しずつ内容を変えて作られていく。2007 年に桜美林大学が参加する際に大

きく変わったのは、「協働学習」の時間を研修中できるだけ毎日確保することである。今年度に関しても、できるだけ協働学習の時間を入れ込む形が取られており、スケジュール的に押すことがあっても何らかの形で話し合う時間を持つことが出来た。

2009年度現地研修の日程は前年度に比べて大学内で過ごす時間が減り、ほぼ毎日学外で研修を行う形となった。1週間の研修で韓国と日本の関係の理解をより深めるために古い歴史と新しい歴史の両方に触れる機会が設定されている。伝統文化についても、講義を受ける形式ではなく、伝統楽器を演奏する学内のクラブの学生たちから実演を交えて学べるよう配慮されていた。また人的交流としては、後で述べるパートナー決めが大変有効で、短期間の研修でもすぐにお互いに馴染めるような工夫がされている。そして、参加学生の多くから一番楽しかったという感想を聞くホームステイが週末に設定されており、研修のしめくりとなっている。(詳細スケジュールは章末<資料2>参照)

韓国に到着した翌日、韓瑞大学の学生とすぐに顔合わせが行われ、そこで「パートナー」を決めるが、このパートナーと1週間行動を共にすることになる。日本人学生の宿舎は、韓瑞大学のメインキャンパスから車で10分程度のところにあるため、実際には朝食を終えて大学や移動バスの中で会ってから、夕飯を終えて解散するまでの時間であるが、多くの時間を韓国人学生と過ごす。韓瑞大学の学生は全員日本学科の学生で、学年は1年生から4年生まで様々であるが、基本的に日本語のみでのコミュニケーションが可能な学生たちばかりである。韓瑞大学の参加学生は、愛媛大学、桜美林大学、目白大学の各大学の日本人学生とそのパートナー学生のまとめ役や、研修全体の進行を補佐する学生代表としての役割も担っており、何かにつけて日本人学生をサポートし、積極的に動いてくれる頼もしい存在であった。韓瑞大学の参加学生募集は、日本学科の学生を対象に希望者を募る形で行われるが、毎年たくさんの応募者があるとのことだった。中には、毎年この研修に参加しているという学生もあり、韓瑞大学の学生にとっても魅力のある研修であることが分かる。今年度の参加者は愛媛大学7名、桜美林大学5名、目白大学7名、韓瑞大学からは21名の総勢40名の学生、各大学の教員各1名である。毎日の研修には国際交流支援課の職員2名、日本学科の教員1名が交代で付き添ってくださり、手厚いサポートをうけながら、安心して研修に臨むことができた。

毎日の研修は内容の大変濃いものである。桜美林大学の学生には振り返りシートを配り、その日にあったことや感じたことを各自で整理する時間を持つようにした。振り返りシートは以下のようなものを使用した(実物はA4サイズ)。

桜美林大学 韓国協働学習体験	2009.8.30-9.6	名前
	月 日 ()	
◎韓国について新たに知ったこと		
◎自文化について新たに気づいたこと		
◆最初は自分（たち）と同じだ／似ていると思ったけれど、違うと分かったもの／こと		
◆最初は違うと思ったけれど、自分（たち）との共通点があったもの／こと		
★今日の気づき・感想		

図4 振り返りシート

振り返りシートは翌朝回収し、気になるコメントがある場合には適宜学生に様子を尋ねることもあった。このシートは帰国後にレポートを作成する際の重要な資料となるので、教師が目を通した上で、帰国後は学生に返却した。愛媛大学は毎晩ミーティングを開いて振り返りを行っていたが、3大学の学生が合同ですることはなかった。それぞれの振り返りでどのような話題が出てきたかについては教師間でできるだけ共有するように心がけた。

研修中、教員は朝の健康チェックと夜の連絡事項の伝達以外は、学生たちから少し距離を置いて見守るように心がけた。日韓の学生同士の時間を大切にするとだけでなく、もし小さな問題が生じた場合でも、自分たちで解決を試みるのが大切だと考えたからである。

協働学習は、桜美林大学は2グループ、愛媛大学と目白大学は3グループに分かれて行った。桜美林大学の学生には、テーマの決定から調査までの道しるべとなるように協働学習の初回にシート（計画書）を配布し、テーマを選んだ理由、テーマについて現在知っていること、テーマについて調べたいこと、予想される結果等を書き出せるようにした（章末＜資料3＞参照）。あくまでも活動の手助けとなるように配布したシートなので、この計画書の提出は求めなかったが、手がかりとして活用しているようだった。実際に学生たちが選んだテーマは、「（飲み会などでする）韓国と日本の共通のゲーム」「日韓の放送スタイルについて」「日本と韓国の1年の行事について」「日本と韓国の生活の中で似ているところと違うところ」「日本と韓国の食文化の比較」などであった。毎日会議室などの場所を借りたり、夕食後の時間も活用したりして話し合いを重ねた。基本的に話し合いは日本語のみで行われたため、韓瑞大学の上級生はそれほど苦労していないようだったが、日本語を学び始めてからまだ日の浅い1年生にとってはかなり大変なものだったと思われる。それでも、辞書を引きながら自分の言いたいことを伝え合おうという姿が見られた。

教師は、テーマ決めや方向性について学生たちから質問があったり、話し合いが滞って

いるときに限り助言をするようにして、基本的には学生たちに任せるようにしていた。他大学の学生の協働学習については継続的に働きかけることはしなかったが、引率教員以外にも質問ができるように何回か声をかけて助言することもあった。学生たちは限られた時間の中で最終日まで発表の準備もしなければならなかったため、苦労が多かったようである。PCなどが近くにない環境でグループワークをすることも少なからずあったのと、毎日スケジュールが押し気味の中、1日の最後の活動として行われることが多かったのと、時間がもっとあればもう少し深められたという声が帰国後の参加者アンケートで聞かれた。発表は3大学全員が参加する研修の締めくくりとして行われたが、視覚的に分かりやすい資料の準備を心がけたり、日韓両言語で発表を準備するなど、どのグループも工夫が見られる発表だった。お互いの発表を通してまた新たなことに気づいたという声も多く聞かれた。

2008年度、2009年度の参加者（計12名）の研修終了後のアンケートを見ると、協働学習については時間不足からテーマを十分に深められなかったという理由で満足感を持てなかった学生が1名いたが、多くの学生は協働学習を通してお互いに意見を交換し、日韓の異同について学びあう貴重な経験となったようである。2007年度はパートナー作りが1対1で行われなかったこともあり、研修参加意欲にムラが出て協働学習の時間に韓国学生が現れず協働学習の話し合いが進まないこともあったと聞いたが、1対1のパートナーを作るようになってからはグループワークがそのような理由で滞ることもなく取り組めていた。今後、協働学習の時間については十分に確保できるよう、韓瑞大学や他の参加大学とも話し合っていきたいと思う。

3.4 事後研修

帰国後1週間を目処に、参加者は研修の成果としてレポートを作成した。長さは3-4ページ程度で、活動報告や考察を含めたものである。提出されたレポートには担当教員がコメントをつけてフィードバックし、学生が修正したものを最終原稿とした。このレポートは全員分をまとめて冊子にし、参加者一人ずつに配布するほか、韓瑞大学や他の参加大学、桜美林大学内の関係部署に提出するものである。

また、レポートの提出とは別に帰国報告を9月25日の6限に学内で行った。この報告会は、リベラルアーツ学群の日本語教員養成科目の担当教員や、基盤教育院、国際交流センターといった各関係部署の教員に加え、韓瑞大学から桜美林大学に留学中の学生も出席する中で行われた。各自、参加の動機や印象に残ったこと、研修から学んだこと、今後の抱負などを10分程度で発表し、出席者からの質問やコメントの時間を持った。

参加者アンケートによると、2008年度、2009年度の参加者（12名）全員がレポート作成をすることで研修全体の意味を確認できたとしている。また、報告会では緊張のあまり

自分の体験したことや感じたことを他者にうまく伝えられなかったと感じた学生もいたようであるが、研修で経験したことがいかに盛りだくさんで貴重なものであったかは、聞き手にも十分に伝わるものであった。

印象に残ったこととして帰国報告会で最も多く挙げられていたのは、「独立記念館」の見学であった。この施設だけは日本人と韓国人が別々に見学をし、施設のプロのガイドを依頼して、日本人だけで説明を聞いている。ガイド付きで見学するのは第2展示館（近代民族運動館）と第3展示館（日本帝国主義侵略館）が中心となる。何となく知っていただけだった日韓の歴史の一部を目の当たりにして、ショックを受けたが、見学時間が終わって韓国の学生と再会したとき、韓国の学生たちから「国と国の関係と個人との関係は別だ」「過去には色々なことがあったけれど、大切なのは今とこれからだ」といったような心優しい言葉をかけられて、本当に救われた気持ちになったとのことだった。帰国報告会の後に、出席していた韓瑞大学の留学生からも同じようなコメントがあり、歴史をきちんと知った上でこれからどのような関係を築いていくかが大切だということを確認しあっている姿が印象的であった。

この「独立記念館」の見学については韓瑞大学側はあまり勧めたくないと思っていたが、愛媛大学の強い要望として採り入れられたと聞いている。桜美林大学が初めて参加した2007年度の研修では日程から外れかけたが、天候の都合で結果的に見学することになり、やはりぜひこのような場所も見学させたいということで、毎年日程に組み込まれているものである。楽しいだけの研修で終わらせたくないという意向を愛媛大学の引率教員から聞いたが、私自身もそのように考える。韓国における韓日の歴史の捉え方をきちんと受け止めた後でパートナーの家に滞在し、家族と言葉を交わすことも大変大きな意義があると思う。ホームステイは、翌年度以降も継続して欲しい企画として学生からの強い要望がある。

4. 国際理解教育科目としての「海外協働学習体験」の意義

参加した学生の多くは、コリア語の学習、韓国旅行、ドラマや音楽といったものをきっかけに韓国に関心をもち、「韓国の友人を作りたい」「より韓国のことを知りたい」という気持ちからこの研修に参加を希望した学生がほとんどである。

実際に参加しているうちに、単に韓国のことを知るだけではなく、日本にいたときには大して気にならなかったようなことに気づいたり、意外な共通点を発見するなど、多くの気づきが毎日の振り返りシートに克明に記述されていた。携帯電話のマナーや食習慣といった日常的な生活に関する異同の発見だけでなく、韓国と日本の古くからの交流についても新たに知ったようである。また、自分が韓国のことを知りたいという気持ちで参加する

のと同じぐらい韓国の学生も日本のことが知りたい、日本人の学生にいろいろ聞いてみたいと思っていたことを実感したことも大きな収穫となっている。さらに、韓国のことを日本語で説明してくれるパートナーたちの姿勢に多くの学生が感動し、自分の国のことをどこまで説明できるのかを考え、もっと日本のことを知らなければならないと感じたという学生も多かった。

帰国後の参加者アンケートには研修全体について尋ねる項目があるが、2008年度、2009年度の12名の参加者のうち、「韓国のことについてもっと知りたくなった」という項目については、全員が「大変そう思う」と回答し、「日本の国や文化をもっと説明できるようにになりたい」という項目は「大変そう思う」が10名、「ほぼそう思う」が2名という結果であった。異文化と接することが自分の文化を見直すきっかけとなっており、科目設置時の目的とされていたように、異文化理解が促進されただけでなく、自国の言語・文化の意識化も進んだことがわかる。

帰国報告会でも複数の教員からコメントがあったが、この研修で学んだことはそこで完結してしまわずに、自分自身のこれからに実際の行動として生かしていくことが大変重要である。研修での体験をどのように生かすのかについても参加者一人ひとりしっかりと意識することができていた。

近年、多文化共生社会の実現を目指そうという動きが盛んであり、そのためのカリキュラム作りも試みられている。カリキュラム作りで意識されているのは、「単に知識や理解の問題ではなく、最終的には学習者の主体的な参加（意思決定）や行動に向けて未来に拓かれたものとして構想」（森茂 2009, pp. 30-31）することである。この「海外協働学習体験－韓国」はこのようなカリキュラムの作りの方向性とも合致した科目であると言える。

研修に参加した学生はアンケートで「このプログラムに参加したことが今後の学生生活にプラスになる」「友人にこのプログラムを勧めたい」という項目について全員が「大変そう思う」と答えている。学生たちの感想から、メディアなどを通して感じるだけでなく、一人ひとりの顔が浮かぶような異文化交流をすることによって、異文化への理解が深まるのだということを実感した。帰国後の参加者はこの経験を活かして外国語の学習、日本について学びなおすこと、留学生をサポートすることなど、多くのことに挑戦したいと思っているようである。このような一人一人の小さな体験こそが多文化共生社会の実現には大切なのではないかと思う。今後もこのような研修に多くの学生が参加し、多文化共生社会の実現を推進する力になっていてもらいたい。

最後に、この研修を支えてくださった韓瑞大学の学長始め国際交流処の教職員の方々、日本学科の先生方、そして心温かい交流をしてくださった韓瑞大学の学生の皆さんに御礼申し上げるとともに、共に研修を作り上げてくださった愛媛大学、目白大学の皆さんに感謝したい。

注

- ¹⁾ 科目の申請は言語コミュニケーション学科日本語教育担当教員の新屋映子氏、安藤節子氏によるものである。
- ²⁾ 基盤教育院のデパートメントは①基盤教育デパートメント②コミュニケーション教育デパートメント③フィールド教育デパートメント④外国語教育デパートメントの4つである。
- ³⁾ 2006 年度以前に入学した旧カリキュラム適応者の授業科目名は「フィールドワーク E」となる。
- ⁴⁾ 愛媛大学でも 2009 年度より単位科目となっている。
- ⁵⁾ 1 名は健康上の理由で参加できなくなったため、実際に 2009 年度の研修に参加したのは 5 名。
- ⁶⁾ 2007 年度は基本的に愛媛大学と桜美林大学の 2 校の参加だったため、抽選は行わず 11 名が参加した。

参考文献

- 安藤節子（2007）「日本語教育専攻における実習の役割と可能性 ―基礎調査と現行の見直し―」『桜美林言語教育論叢』第 3 号, pp.101-113, 桜美林大学言語教育研究所
- 森茂岳雄（2009）「多文化共生をめざすカリキュラムの開発と実践 ―学会・学校・教師の取り組み―」『異文化間教育』30 号, pp.25-41, 異文化間教育学会

<資料1> 参加者アンケート（安藤節子氏作成）

参加者アンケート（2007 - 2009 年度共通）

以下の各項目について、次の基準で答えてください。（○で囲む）

4 = たいへんそう思う、3 = ほぼそう思う、2 = あまり思わない、1 = 全然思わない

2 および 1 を選んだ場合は、理由を必ず教えてください。4 および 3 を選んだ場合も、なるべく理由を書いてください。

◆事前研修

内容は適切だった…………… 4 3 2 1)
理由 ()
時間数は適切だった…………… 4 3 2 1)
2、1 の場合、適切な時間数 ()

◆現地研修（1）：協働学習

発表したテーマや内容に満足感がある…………… 4 3 2 1)
理由 ()
相談中、自分の考えを日本語 / 韓国語でうまく伝えることができた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
他者の考え（ことば）を理解することができた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
グループでよく話し合い協働して遂行することができた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
積極的に活動に参加し、自分の力を発揮することができた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
協働学習に希望することや感想などなんでも ()

◆現地研修（2）：見学 / 各種体験 / ホームステイ

活動しながら感想や意見を交換して交流することができた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
来年以降も継続してほしい企画（具体的に 例 伝統音楽体験、ホームステイ、…）
()
見学&体験について希望することや感想などなんでも ()

◆現地研修（3）：その他

住環境は、活動するのに適切だった…………… 4 3 2 1)
理由 ()
キャンパス内設備は、活動するのに適切だった…………… 4 3 2 1)
理由 ()
費用は適正だった…………… 4 3 2 1)
理由 ()
環境その他について希望することや感想などなんでも ()

◆事後研修

レポート作成によって協働学習の意味が確認できた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
発表で、体験したことを他者によく伝えることができた…………… 4 3 2 1)
理由 ()
積極的に取り組み、自分の持っている力を発揮した…………… 4 3 2 1)
理由 ()
事後研修について希望することや感想などなんでも ()

◆全体

韓国のことについてもっと知りたくなった…………… 4 3 2 1)
日本の国や文化をもっと説明できるようになりたい…………… 4 3 2 1)
このプログラムに参加したことが今後の学生生活にプラスになる…………… 4 3 2 1)
理由 ()
友人にこのプログラムを勧めたい…………… 4 3 2 1)
理由 ()
韓国以外の国で同様の体験を考えるとしたら交流したい所 ()
このプログラムについて希望することや感想などなんでも ()

以上

※ ご協力ありがとうございました。

<資料2> 2009 年度 日程表

【2009 年度 日程表】

- | | |
|--------------|--|
| 8 月 30 日 (日) | - 夕方 仁川空港到着 |
| 31 日 (月) | - 総長表敬訪問
- 韓瑞大学の学生との組編成、キャンパス散策
- 協働学習
- 韓国文化体験 (クラブとの交流会、サムルノリ)
- 歓迎会 |
| 9 月 1 日 (火) | - 現代文化関連地見学
(南揚州総合撮影所 (映画「JSA」ほか撮影地))
(チャングムの誓いテーマパーク (ドラマ「大長今」撮影地))
- 協働学習 |
| 2 日 (水) | - 歴史遺跡見学Ⅰ (落下岩、白馬江、百済歴史文化館ほか)
- 協働学習 |
| 3 日 (木) | - 歴史遺跡見学Ⅱ (独立記念館)
- 協働学習 |
| 4 日 (金) | - 海の散策 (看月庵見学)
- 泰安飛行場見学
- 協働学習,
- 韓日友情の夜 (交流会)
- 泰安飛行場寄宿舍泊 |
| 5 日 (土) | - 協働学習発表会
- 送別会 (昼食)
- ホームステイ出発 |
| 6 日 (日) | - ホームステイ
- 午後帰国 |

<資料3> 協働学習テーマ計画シート

「海外協働学習体験」 作成：安藤 2008／一部改：家田 2009 年 月 日	
2009 年度協働学習 計 画 書	
グループのメンバー：	
(1) テーマ	
(2) このテーマを選んだ理由	<div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>
(3) テーマについて 現在知っていること	<div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>
テーマについて調べたいこと	<div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>
予想される結果（現在自分が予想していること）	<div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>